

「農地の活用と地域の活性化」をテーマに講演会を開催

国営農地開発事業北淡路地区における営農推進活動の一環として、淡路島東浦サンパークにおいて、農地の活用と地域の活性化をテーマに「国営北淡路地区営農推進講演会」を開催しましたので、その概要について紹介します。

本講演会は、国営北淡路地区の耕作放棄地解消に向けた支援のひとつとして、眠っている地域資源（農地）を有効に活用して地域を元気にする取組などについて、地域が主体となって考えるきっかけづくりを目的として開催しました。

講演会では、①資源を活かした地域づくり、②「農と地域の活性化」を目指して。類農園16年の取組、③北淡路地区における参入企業のがんばる取組、の3つの内容でお話をいただきました。

講演会は、農政局が淡路市、北淡路土地改良区等と連携して開催し、当日は受益農業者をはじめとして、地元参入企業、行政関係者など、全体で約100名の参加がありました。



講演会のようす

資源を活かした地域づくり

東京農工大学大学院 客員教授 福井 隆 氏

福井先生は「地元学」の実践者。年間300日以上も日本中の集落を飛び回って得た様々な経験・体験から、今あるもので何ができるかを考える「地元学」を通して地域を元気にする方策の大切さを訴えました。

○ 足もとにある資源の価値を見だし、活用を！

島根県江津市（旧桜江町）では、一人のIターン者が地域内に多くの荒廃した桑園があることに気づき、この地に桑が多い背景を調べ、また、桑の葉の成分も調べました。そして、この地域の桑の葉はフラボノイド濃度が高いなどの優位性を見つけ、それらを活かした「桑茶」を商品開発しました。これにより、見捨てられ耕作放棄地化した数百ヘクタールもの桑園が復活し、多くの雇用も生み出しています。

山形県鶴岡市では、地元に戻ってレストランを始めたシェフが地元食材を求めて庄内地域を歩くなかで、在来種のネギなどよそにはない農作物が多くあることに気づきます。そして、そのおいしい食べ方を料理として提供。全国からここにしかない味を求めて多くの人が訪れるようになり、地元食材が評判となることで地域の農作物がブランド化。農家は自分たちの作る農産物の美味しさに自信を取り戻し、多くの農家に後継者が誕生しています。

これらは、足もとにある資源に気づき、それを活かして、新しい価値を生み出し地域を再生した取組といえます。新しいものを生み出せない地域は生き残れない時代です。ないものねだりではなく、あるものとあるものを組み合わせて新しい価値を生み出すことを基本に考え、地域再生を考えることが大切です。

○ 淡路島を背景に価値をつくる

農産物の新たな「価値を作る」上では、地域のDNAは何かを考えることが有効です。地域がどのような背景を持っているかをうまく活かせば、大きな可能性が開きます。例えば、あわじ花さきでは、本当にきれいな菜の花が咲いていました。「淡路島は花がとてもきれい」など淡路島の特徴や魅力を背景に、新たな価値を上乘せすることができれば、農産物のブランド化や地域づくりに結びつけることも、ひいては地域の暮らしを未来につなぐことも可能ではないでしょうか。



整枝復元された桑

「農と地域の活性化」を目指して。類農園16年の取組 (有)類農園 代表取締役 大嶋 洋一 氏

平成11年に建築設計事業等を経営する類グループから奈良県宇陀市などに農業参入してから16年。現在も地域活性化に向けた新たな事業に挑戦しています。

○ 新たに開設した直売所を活かして地域農業を活性化

類農園では、昨年10月に大阪府茨城市に新たな直売所を開設。ここには、地域の農家の方々も野菜などを出荷しています。多くの出荷者がかかわることで直売所には品揃えが豊富になるメリットがあり、農家の方々にとっても売り先が確保できることで作る意欲が出ます。生産量が増えていけば、いずれ耕作放棄解消にも繋がるかも知れません。

直売所で消費者から届いた声は出荷農家にもきちんと伝えます。嬉しい評価をいただければ農家と一緒に喜び、改善点をいただければ真摯に受け止めて農家とともに対応策を追求していきます。

○ これからは「供給発」の時代

これまでは、需要があって供給があるというのが一般的な考えでしたが、これからは、アピールできる供給があって初めて需要が生まれます。つまり、どんどん生産者の方から自らのこだわりをアピールすることで、需要を喚起することが可能な時代になっているし、逆にそうしなければ生き残れない時代になったと考えます。

地域の活性化や再生も同じで、地域の側からどんどん情報を発信していくことで、域内・域外を問わず人とのつながりができ、地域の活力UPにつながるのではないのでしょうか。



消費者の声は生産者に



生産者のこだわりを消費者にPR

北淡路地区における参入企業のがんばる取組 兵庫県北淡路農業改良普及センター 山口 岳人 氏

普及センターでは、農業参入を希望する企業の増加傾向を踏まえ、農業参入する企業を地域農業の新たな担い手として位置づけ、育成・支援に取り組んでいます。

○ 参入企業による農地の再生、そして連携の動き

淡路市内の企業の農業参入は11社。うち6社がたまねぎを生産しており、企業参入によるたまねぎ栽培は3年間で20haまで増加しました。企業参入では耕作放棄地も活用されており、造成地を含め計6haの農地の再生が図られています。また、農業関係で約20名の雇用創出にもつながっており、取組の成果が少しずつ現れています。

参入企業には建設、運送、食品など様々な業種があり、それぞれの強みをいかした連携の動きもみられます。たまねぎを例にすると、参入企業A社がむきたまねぎにし、B社がオニオンソテーに、C社が「淡路島」名を冠したブランド食品に加工して、自社の販売ルートで売るといった具合です。また、地元製麺業者と連携して淡路産の生パスタを製造・販売しようという動きもみられ、この取組でも樹木が生い茂った遊休農地が小麦栽培地へと再生されています。



再生農地ではパスタ用小麦を栽培

○ 参入企業には地域に貢献する意識を！

普及センターが参入企業に求めるものは、「地域への貢献」という意識で、これがないければ企業が農業に参入する意義が薄まり、地元からの協力も得られにくくなると思います。

今後は、参入企業が地元の集落営農組合と連携したり、オペレーターが不足する地域を応援し、さらに地域への貢献度が高まるような誘導方向も考えているところです。



大型機械化体系によるたまねぎ栽培